

外国語（英語）科における 言語活動中心の単元構想と評価の在り方に関する研究

生徒の英語によるコミュニケーション能力の向上を目指し、外国語（英語）科において、学習到達目標を明確にした言語活動中心の単元構想の在り方、及び生徒が言語活動を通して身に付けた能力を適切に評価するためのパフォーマンス課題及びルーブリックの作成方法について協議し、授業実践を行った。各実践により、ルーブリックを用いて明確な基準で評価することにより、生徒に次の学習への見通しをもたせ、学習意欲を高めることができることや、教師のさらなる授業改善に生かすことなどが示された。

<検索用キーワード> 英語 授業改善 学習到達目標 単元構想 言語活動
パフォーマンス評価 ルーブリック

研究協議会委員

県立昭和高等学校教諭	名和 孝（平成25年度）
県立名古屋西高等学校教諭	遠藤 啓史（平成25、26年度）
県立瀬戸北総合高等学校教諭	箕浦 麻里（平成25、26年度）
県立一宮興道高等学校教諭	武田 邦生（平成26年度）
県立横須賀高等学校教諭	小島 裕美（平成25、26年度）
県立豊田西高等学校教諭	今田 祐之（平成25、26年度）
県立松平高等学校教諭（現県立豊田東高等学校教諭）	山本 徳子（平成25年度）
県立西尾高等学校教諭	筒井 彩（平成26年度）
県立豊丘高等学校教諭	白井 敬子（平成26年度）
県立御津高等学校教諭	鈴木 稔（平成25年度）
総合教育センター研究指導主事	関 友彦（平成26年度）
総合教育センター研究指導主事	金澤 学（平成25年度）
総合教育センター研究指導主事	河野 健治（平成25、26年度）
総合教育センター教科研究室長	米津 明彦（平成25、26年度主務者）

1 はじめに

平成25年度に全面実施となった今次高等学校学習指導要領では、外国語科の目標を「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」としている。この目標達成のためには、英語による言語活動を授業の中心として生徒が英語を使う機会を充実するとともに、生徒が身に付けた能力を適切に評価することにより、生徒に次の学習への見通しをもたせ、自律的な学習を促すことが求められている。

愛知県では、平成25年度から、英語をコミュニケーションの道具として高いレベルで使いこなす人材の育成を目指して「あいちスーパーイングリッシュハブスクール事業」を推進している。先進的英語教育の拠点となる高等学校を指定して指導方法等の研究を進めるとともに、地区別授業研修や授業づくりワークショップ等も実施して、本県英語科全体の授業改善と教員の力量向上を図っている。

総合教育センターでは、当面する英語教育の課題に関する調査研究のため、「教科指導の充実に関する研究（英語）」を研究協力委員とともに進めている。平成20年度には「TBLT(Task-Based Language Teaching)導入による英語授業の改善ータスク活動を通じたコミュニケーション能力の育成ー」という

主題設定の下、生徒の「コミュニケーション能力」の育成を図る英語授業の在り方について検討し、「TBLT：タスク中心の教授法」に焦点を当て、「タスク活動に関する基礎知識」、研究協力委員による「タスク活動を導入した授業実践例」、及び「授業を英語で行うための英語表現集」をまとめ、生徒のコミュニケーション能力の育成と英語の授業改善を図るための資料の提供を試みた。

平成24年度には「コミュニケーション能力を育成する外国語科指導の在り方に関する研究－単元構想の工夫と言語活動の充実－」のテーマで、今次学習指導要領の趣旨を踏まえて、学習到達目標を明確にした単元構想と、言語活動を中心とした英語で行う授業の在り方について検討した。生徒の実態を捉えた上で、英語によるコミュニケーション能力を育成するために、ペア・ワークやグループ・ワークを設定したり、Q-Aやワークシートを工夫したりして授業実践を行った。各実践により日本語訳に頼らず英問英答による内容理解ができることや、英語での自己表現活動において生徒の意欲が高まるなどの成果が得られ、言語活動を充実した単元構想により授業改善の効果が示された。

これらの先行研究を受けて、平成25年度から本年度にかけて、言語活動を中心とした単元構想及び学習指導案の作成方法について継続して検討するとともに、生徒が言語活動を通して身に付けた能力を適切に評価する方法についての協議を加え、評価を含めた授業実践を行うこととした。その成果と課題を考察し、これからの指導と評価の改善に向けた提案を目指すこととした。

2 研究の目的

高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、生徒の英語によるコミュニケーション能力の向上を目指した指導と評価の在り方について研究する。特に、学習到達目標を明確にした言語活動を中心とする単元構想の在り方、及び生徒が言語活動を通して身に付けた能力を適切に評価するためのパフォーマンス課題及びルーブリックの作成方法について、研究協力委員相互で協議し、授業実践を基に指導と評価の改善への指針を提案する。

3 研究の方法

平成25年度の研究協議会においては、学習到達目標を明確にした言語活動を中心とする単元構想及び学習指導案の作成方法について検討した。研究協力委員相互の模擬授業も行い、具体的な指導場面を想定してより効果的な言語活動を中心とした単元構想の在り方を探った。

平成26年度の研究協議会においては、生徒が言語活動を通して身に付けた能力を適切に評価するためのパフォーマンス課題及びルーブリックの作成方法について、実際に研究協力委員の所属校で行うそれぞれの単元構想を基に協議した。その上で評価を含む授業実践を行い、成果と課題をまとめる。特に所属校での実践に当たり、次の項目について明確になるように留意した。

(1) 実践のねらい

- ・生徒の学びの現状
- ・指導と評価における課題
- ・身に付けさせたい力

(2) 実践の計画

- ・学習指導計画（言語活動の工夫、ワークシートの工夫）
- ・評価計画（評価場面、パフォーマンス課題、ルーブリック）
- ・単元構想（単元の目標と言語活動、評価規準、指導と評価の計画）

(3) 実践の記録と考察

- ・授業における言語活動の取組状況
- ・評価の実際
- ・成果と課題

4 研究の内容

(1) 実践のねらいの明確化

授業と評価の実践に際し、平成 26 年度研究協力委員の各所属校におけるねらいを明確にするために、各研究協力委員が「生徒の学びの現状」及び「指導と評価における課題」把握し、「身に付けさせた力」を設定した。

(2) 実践の計画の具体化

実践の計画に当たっては、学習指導計画のうち、「言語活動の工夫」及び「ワークシートの工夫」に重点を置くとともに、評価計画に「ルーブリック」を導入した。その上で、単元の学習到達目標を実現するために、単元全体を見通した「単元構想」を作成した。

(3) 実践による成果と課題の把握

実際の生徒の言語活動への取組の様子及び評価結果を基に、学習到達目標を明確にした言語活動中心の単元構想及びルーブリックによる評価についての成果と課題を把握し、各研究協力委員の所属校での指導と評価の改善に生かすとともに、他校の参考となるように、実践に至る過程を含めて成果を発信する。

(4) 研究協力委員 7 名による実践概要

ア 県立名古屋西高等学校における実践（コミュニケーション英語Ⅰ）

「コミュニケーション英語Ⅰにおけるペア・ワークによる言語活動と評価ー積極性の育成に重点をおいた評価の流れー」をテーマとした。生徒の実態を、真面目で素直な気質で、音読活動には積極的であるが、自ら主体的に考え、課題に取り組むことや自己表現活動には消極的であると捉えた。自己表現活動に対する積極的な態度を育成するために、フローチャート形式で単元の要点を整理し、メモを基にした発表活動（ペア・ワーク）を通して自分自身の考えをまとめ、最終的にエッセイを書く言語活動を設定した。

評価については、「自分のことについて、発表することができる」（表現の能力）と「ペア・ワークにおいて積極的に自分の考えを伝えようとした」（関心・意欲・態度）を観点としたルーブリックを作成し、授業中の活動を観察して評価することとした。ルーブリックを事前に示したことと、評価の配点において、「関心・意欲・態度」に比重をかけたことにより、生徒の言語活動への取組はより積極的になった。

イ 県立一宮興道高等学校における実践（コミュニケーション英語Ⅱ）

「コミュニケーション英語Ⅱにおける討論の指導と評価ー「論点」と「根拠」をもたせる指導ー」をテーマとした。生徒の実態を、真面目で与えられた予習は期日までに行い、コミュニケーション活動には積極的に参加するが、自ら課題を見つけ、計画的に取り組むことや意見交換や議論の活動の質を高めることには課題があると捉えた。「論点」と「根拠」を明確にして自分の意見を発表する能力を育成するために、タスクシートを活用したペア・ワークを充実させ、単元のまとめの活動としてグループでのディスカッションを実施することとした。

評価については、単元の最後に行うディスカッションを中心に行った。授業中にディスカッションの様子を観察して「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の観点から評価するとともに、ディスカッションをまとめたタスクシートを用いて「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」の観点から評価することとした。いずれもルーブリックに基づき評価した。ルーブリックを用いることで評価者によって評価がぶれることなく、客観性を保つことができた。また、評価に迷うことも少なく、時間も短縮することができた。さらに、評価した後は、評価表を生徒に返却することで、事後の学習上の課題や改善点を明確に把握させることができた。単元を通して論理的な意見交換の場としてのペア・ワークを繰り返し行い、自己評価による振り返りも継続したことにより、多くの生徒が相手の意見に対して自分の考えを建設的に伝えることができたようになった。

ウ 県立豊丘高等学校における実践（英語表現Ⅰ）

「英語表現Ⅰにおけるライティングの評価と指導ーパフォーマンス課題とその評価ー」をテーマと

した。生徒の実態を、ペア・ワーク、表現活動や音読に活発に取り組むが、即興性のある活動やクラス全体への発表には慎重になる生徒が多いと捉えた。積極的に英語を使って表現する態度や、キーワードを基に書いて説明する力を身に付けさせるために、日本や地元の伝統的なものや文化についての説明を聞き、その内容を他の生徒に伝えたり、キーワードを基に各自が選んだ話題について書いて説明したりする言語活動を設定した。

評価については、「伝統・文化の説明をキーワードを用いて書くことができる」「文法、綴りなどに気を付けて書くことができる」の2項目を評価規準として設定し、ループリックを用いて評価することとした。地元の食べ物から日本の伝統行事に至るさまざまな内容について、大半の生徒が自ら考えたキーワードを用いて、工夫を加えながら具体的に書くことができた。評価規準をあらかじめ生徒に示し、到達目標を意識させることで、生徒は書き方や内容にいつそうの注意を払って活動に臨むことができた

エ 県立豊田西高等学校における実践（英語表現Ⅱ）

「英語表現Ⅱにおける即興議論の指導と評価一言語活動の「活動の観察」による評価」をテーマとした。生徒の実態として、学びに前向きで活発な生徒が多く、積極的にペア・ワークや自己表現活動に取り組むが、英語による表現力はまだ不足していると捉えた。英語を用いて論理的に意見を主張し、議論する能力を向上させるため、家庭学習から授業中の言語活動に至るまでの一連の内容を盛り込んだワークシートを作成するとともに、単元の冒頭で行うペア・ワークにおいて即興で議論する言語活動を設定した。

評価については、「スマートフォンの功罪について、即興で議論できる」（外国語表現の能力）と「ペア・ワークにおいて互いに協力しながら会話を続けることができる」（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）の2点について、ループリックに基づき、授業中の活動を観察して評価することとした。ループリックを用いて評価を行うことで、生徒の目標達成状況が把握できるとともに、評価結果から議論を重ねる度に上達する傾向が見られた。ループリックをうまく活用すれば、生徒自身が自分の力の向上を具体的に知ることができるため、さらなる学習の動機付けにもなることが分かった。

オ 県立西尾高等学校における実践（英語表現Ⅱ）

「英語表現Ⅱにおける発表活動とその評価－伝える力の育成を目指して－」をテーマとした。生徒の実態を、熱心に学習に取り組み、授業中の活動にも活発に参加し、楽しみながら学びを進め、家庭学習にも計画的に取り組むことができる一方で、週末課題やテスト前の勉強だけに終始する生徒もいると捉えている。4技能をバランスよく使えるコミュニケーション能力、特に、言葉として「伝える」ということを意識した英語力を身に付けられるように、本実践では、生徒が自分自身の大切なものについて相手に伝えることとして、ペア・ワークの後に学級全体での発表（Show and Tell）をする言語活動を設定した。

評価については、Show and Tellの「内容」「英語」「デリバリー」の項目で作成したループリックに基づき評価することとした。Show and Tellを単元構想の中心として、構成を意識したスクリプト作成に取り組ませた上でクラス全体での発表活動を行ったところ、生徒は時間をかけてアイデアを練り、推敲をしながら、言いたいことをうまくまとめて伝えられるようにと努力していた。発表においては、原稿を持たずに発表に臨む生徒も見られ、また、聞き手であるクラスメイトは一生懸命理解しようと発表に耳を傾け、その上でコメントを書くなど、デリバリーへの意識を根付かせることはできた。

カ 県立横須賀高等学校における実践（英語表現Ⅱ）

「英語表現Ⅱにおける表現力の育成と評価－プレゼンテーションによる発信－」をテーマとした。生徒の実態として、向上心のある生徒が多く、教師の指示に素直に従って活動をするが、英語に対しては受動的で、表現力も不足していると捉えた。学習したことを理解するだけでなく、それを使って表現していく積極性を身に付けさせるとともに、生徒が英語で発信していく力を育成するために、1分程度のプレゼンテーションをグループ及び全体の場で行う言語活動を設定した。

評価については、「日本や外国で行ってみたい場所を一つ挙げ、プレゼンテーションすることができる」（外国語表現の能力）について、ループリックに基づき、プレゼンテーションにおいて評価することとした。単元を通して、プレゼンテーションを目標に、導入から原稿作成へつながりをもって生徒は取り組むことができた。聴く態度も良好であり、この活動を行うことで生徒は積極性を高めることができた。

キ 県立瀬戸北総合高等学校における実践（ライティング）

「ライティングにおけるエッセイ・ライティングとプレゼンテーションの指導と評価ー生徒の活動中心の授業による発信力の育成を目指してー」をテーマとした。生徒の実態を、英語力は決して高くないが、元気がよく活動的であるため、活動を中心とした授業が適している。知識を事前に与えれば、使って発表しようとする意欲はあるので、まずは英語を使いたいと思わせる動機付けが重要であると捉えている。授業のどの過程においても、一人一人が英語を使う機会を多くつくり、自信をもって話す態度と発信する力を身に付けさせるようにしている。伝えたいことを論理的に書く力、プレゼンテーションにおいては、ジェスチャー、アイ・コンタクトを含めたデリバリーを考えながら効果的に話す力を身に付けさせることを普段の授業から目指している。本実践では、発信する力を育成するために、エッセイ・ライティング（今回はトラベル・ジャーナル）とプレゼンテーションの言語活動を設定した。

評価については、クラス全体の前で行うトラベル・ジャーナルのプレゼンテーションにおいて、聞き手に伝わるように話しているかというデリバリーの観点（声の大きさと抑揚、アイ・コンタクト、表情、姿勢、ジェスチャーなど）からループリックを用いて評価することとした。細かい評価基準により、どのクラスにおいても、比較的混乱なく評価できた。また、プレゼンテーションを録音することで、評価についての生徒の疑問にも答えることができるようにし、評価の信頼性を高めることができた。

5 成果と課題

(1) 言語活動及びループリックを導入した指導と評価の成果と課題

- ・ループリックを作成し、評価基準を設定したことで、評価場面で迷うことは少なかったため、信頼性は高かったと考える。しかし、複数の教員が評価に携わる際には、十分なすり合わせが必要になるだろう。（名古屋西高等学校）
- ・単元の目標を示したループリックを前もって提示することにより、生徒に学習の指針を与えることができた。また、タスクシートを用いて段階的に学習できるようにした結果、生徒たちは次に何をすべきか、最終的に何ができるようになるかをはっきり自覚した状態で授業に臨むことができた。（一宮興道高等学校）
- ・ループリックの「外国語表現の能力」についての評価規準は、生徒にとって目指すべき英語力の指標を与えるものとなり、生徒の学習意欲の向上につながったが、一方、「言語や文化についての知識・理解」については、高校2年生の段階として、誤りをどこまで許容するかについての判断基準の設定の難しさを痛感させられた。今後、生徒の英語によるコミュニケーション能力を総合的かつ統合的に高めるために、言語活動のさらなる質的向上を目指してパフォーマンス課題を工夫するとともに、生徒の達成状況に応じて評価規準とループリックを改善していく必要がある。（豊丘高等学校）
- ・本実践を通して、「活動の観察」による評価を行う際の留意点と、その評価をアドバイスとともに生徒にフィードバックすることの有用性を確認できた。また、このような「活動の観察」の評価を積み重ねながら、集大成としてのパフォーマンステストを実施することの必要性を強く感じた。各単元の活動の観察等による評価を通して、改善すべき点を教師から生徒にフィードバックする。生徒は、自分に足りない部分を認識してそれを補うために学習する。そして、パフォーマンステストでその成果を発揮し、更に改善が必要な点があるかを指摘してもらう。このようなサ

イクルが出来上がれば、生徒は英語を用いた言語活動にもっと意欲的に取り組むはずである。(豊田西高等学校)

- ・ルーブリックに挙げた構成、英語、そしてデリバリーの三つの評価項目は、本単元で身に付けさせたい外国語表現の能力を測るのに適切であったと考えている。担当教員からは、「メッセージを的確に伝えるためには、『英文の論理的な構成』『間違いの少ない英語』『声の明瞭さやアイコンタクト』が欠かせない。その意味で、今回のルーブリックでは『聞き手に分かりやすく説明することができる』という漠然とした表現である単元の目標を、分かりやすく項目化することができた」という意見や、「発表者の点数と聴衆の理解度は比例していたようであった」という声もあった。このことから、担当教員の実感として、ルーブリックの評価項目や採点基準も適切であったと考えられる。(西尾高等学校)
- ・評価はルーブリックに基づいて、生徒と教員双方で行った。発表の評価規準は明確ではあったが、しっかり練習してきた生徒の評価とそうでない生徒の評価にあまり差が表れない結果となってしまった。その結果、ほとんどの生徒が高得点であった。生徒の意欲をよりよく反映させるため、今後は、採点項目や採点基準の見直しが必要であると感じた。(横須賀高等学校)
- ・パフォーマンステストにおいて、評価項目を細かく設けて評価をした。今後、クラス間、指導の教員間において評価の差が生じることを防ぐために、録音したものを複数の教員で評価するなど、公平性を保つ方法を検討していきたい。また、生徒たちが改善点を知り、次への指針となるようなフィードバックを与えたい。定期考査の機会だけではなく、パフォーマンスに対するコメントシートをつくって、一人一人に渡せるようにすることなどを検討していきたい。(瀬戸北総合高等学校)

(2) 今後の実践の方向性

今回の実践から、生徒が言語活動によって身に付けたコミュニケーション能力を、パフォーマンス課題を設定してルーブリックを用いて明確な基準で評価することにより、生徒に適切なフィードバックを与え、次の学習への見通しをもたせることができると考える。さらに、単元構想や言語活動の修正など、指導改善に生かすこともできる。

今後は、生徒の学びの実態に応じて、自分に関わりのあることとして意欲的に取り組めるような課題設定や、ポートフォリオなどによる学習のプロセスを評価する手法についても研究を進めたい。また、アンケート調査については選択肢を偶数にしたり、質問項目を精選したりするなど基本的な検討を要する。生徒の能力向上に資する実践を重ね、その成果を各校に還元し、さらには県下の高等学校に広めることも課題としたい。

参考文献等

- 文部科学省(2009)『高等学校学習指導要領』文部科学省
- 国立教育政策研究所(2012)『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【高等学校 外国語】～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～』国立教育政策研究所
- 文部科学省(2012)『言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】<外国語>』文部科学省
- 文部科学省(2013)『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』文部科学省
- 愛知県総合教育センター(2009)『TBLT導入による英語授業の改善ータスク活動を通じたコミュニケーション能力の育成ー』愛知県総合教育センター
- 愛知県総合教育センター(2012)『コミュニケーション能力を育成する外国語科指導の在り方に関する研究ー単元構想の工夫と言語活動の充実ー』愛知県総合教育センター
- 愛知県総合教育センター(2014)『平成25年度高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究 研究成果報告書』愛知県教育委員会